

# 考えや思いを他者に広く伝えることができる児童の育成 ー キャリア教育の視点を重視した「学びの発信」を通して ー

富田 澄美子

小学校高学年の児童は、他者との交流や社会との関わりが次第に多くなり、社会性、自主性等が育まれる時期である。そのため、考えや思いを他者に広く伝え、様々な人々と主体的に関わる力を高める必要があると考える。本研究では、学習の中にキャリア教育の視点を取り入れた「学びの発信」のプロセスを構想し、「学びの発信1」では聞く力・自分を表現する力の育成、「学びの発信2」では他者に伝える力の育成を図ることを試み、音楽科で検証した。その結果、「学びの発信」のプロセスの有効性が見られ、考えや思いを他者に広く伝えることができる児童の育成につながった。

キーワード：キャリア教育、発信、聞き方、他者に伝える、音楽科

## I 主題設定の理由

研究協力校F小学校(以下、F小学校)では、自分の考えを他者に伝えることに苦手意識がある児童が多いという実態がある。このため、自分の考えを伝え合う力の育成が学校全体の課題として挙げられている。また、研究の対象とする第5学年の児童は、高学年として、他者との交流や社会との関わりが次第に多くなり、社会性、自主性等が育まれる時期である。

児童の実態と発達の段階を踏まえ、キャリア教育において育成する基礎的・汎用的能力の一つである「人間関係形成・社会形成能力」を段階的に身に付けていくことが必要と考えた。そこで、第一段階として、教室において、話し手側に立った聞き方を意識させることで話し手が表現しやすい環境をつくり、自分を表現する力を高め、第二段階では、第一段階で身に付けた力を基にしながら、教室内の学びを教室の外に伝えていく活動を通して他者に伝える力を高めることを考えた。

この二つの段階を通して「人間関係形成・社会形成能力」を身に付けていくことで、考えや思いを他者に広く伝えることができる児童が育成できると考え、本主題を設定した。

## II 研究仮説

キャリア教育の視点を学習の中に取り入れた、段階的な「学びの発信」を通して、考えや思いを他者に広く伝えることができる児童が育つであろう。

## III 研究内容

### 1 児童の実態把握

F小学校第5学年の児童23名を対象として、7月に事前アンケートを実施した。事前アンケートでは、基礎的・汎用的能力を把握するための項目や、自分の気持ちを伝えることについてどのような意識をもっているかについての項目を設定した。「授業中、自分の考えを積極的に話したり、話合いに参加したりしているか」の問いに対して、「あまりしていない」と回答した児童は13名(57%)であった。その理由として、「緊張する」「恥ずかしい」「話すのが苦手」「自信がない」等が挙げられた(資料1-①)。「授業中、相手が伝えたいことは何かを考えながら最後までしっかり聞こうとしているか」の問いに対しては、22名(96%)が肯定的な回答をしていた(資料1-②)。一方、「話す人が『話しやすい』『話したい』と思えるような聞き方を意識しているか」の問いに対し、「いつもしている」「ときどきしている」と回答した児童はいなかった(資料1-③)。「自分の気持ちや考えていることを誰かに伝えるのは楽しいか」の問いに対し、20名(87%)の児童が肯定的な回答をしていた(資料1-④)。

その理由として、「自分のことを分かってもらえるから」「みんながびっくりしたり、自分の言ったことを考えてくれたりするのがうれしいから」「話すとすっきりするから」等が挙げられた。

次に、「自分の意見や考えを伝えるとき、どのような態度で聞いてもらおうと話しやすい

か」の問いに対しては、「視線が向いているといい」「反応(うなずき, 笑顔)をしてもらいたい」「最後まで真剣に聞く」等の記述回答が挙げられていた。以上の結果から、伝えることは楽しいと感じているが、自分から進んで話すことには苦手意識があり、積極的に意見を伝えることができない児童が多いことが明らかになった。また、「聞き方」については、相手の話を聞こうとはしてはいるが、「話し手側に立った聞き方」についてはほとんど意識されていないことが分かった。

## 2 研究の構想

F小学校の児童の実態及び高学年の児童として目指す姿から、学習過程に発信プロセスを構想する(資料2)。「学びの発信1」では、聞く力・自分を表現する力の育成、「学びの発信2」では、他者に伝える力の育成を図る。

### (1) 学びの発信1

「学びの発信1」では、各教科の授業や学級活動の中で、個の伝える力や学級内の友達との関わりを重視する。協力したり、意見を出し合ったり、認め合ったりすることで、自信をもって伝えることができるようにする。そのための手立てとして、「話し手側に立った聞き方」に焦点を当て、聞き手が優しい視線やうなずきなどの反応を示すことで、話し手に共感の姿勢を伝え、安心感をもって話すことができるようにする。ここでは、「聞き方」を意識した学級内での活動場面を意図的に設定し、その中で、話し合うグループの形態や学習内容を工夫しながら、伝えることや関わることの基礎を養う。

「学びの発信1」を通して身に付けた力を、「学びの発信2」につなげる。

### (2) 学びの発信2

「学びの発信2」では、他者に働きかける力を重視する。この場合の他者は、他学年児童や家族、地域住民など、学級外の人々のことである。手立てとして、学んだことや自分の考えや思いをよりよく伝えるための方法や、自分の考えや思いをよりよく伝えるための方法を学級内で考える課題解決的な活動を取り入れる。また、伝える相手を意識するために、「相手の立場に立った伝え方」をキーワードにする。課題を共に解決していくことを通して、相手によりよく伝えるためにどのような工夫が必要であり効果的であるかを考える。活動はグループや学級全体で行い、話し合うときには、他者の考えや立場を理解したり互いに意見を伝えたりできるように、「学びの発信1」で身に付けた「聞く力・自分を表現する力」を基にする。

	□ いつもしている	■ ときどきしている	▨ あまりしていない	□ほとんどしていない
①授業中、自分の考えを積極的に話したり、話し合いに参加したりしているか	3	7	13	名
②授業中、相手が伝えたいことは何かを考えながら最後までしっかり聞こうとしているか	11	11	1	
③話す人が「話しやすい」「話したい」と思えるような聞き方を意識しているか	6	17		
④自分の気持ちや考えていることを誰かに伝えるのは楽しい	7	13	3	

資料1 事前アンケートの結果(一部) 児童数23名

考えや思いを他者に広く伝えることができる児童

### 学びの発信2

#### 他者に伝える力

- ①相手の立場に立った伝え方
- ②課題解決的な活動

他者に働きかける力を重視

### 学びの発信1

#### 聞く力・自分を表現する力

- ①話し手側に立った聞き方
- ②意見交流・認め合い

個の伝える力や友達との関わりを重視

自分の考えを他者に伝えることに苦手意識をもつ児童

資料2 研究の構想

### 3 検証方法

上記の構想に沿って検証授業を7月と10月の2回行う。それぞれの検証授業の活動の様子や学習シートへの記述、授業後の事後アンケート結果により児童の変容を分析する。また、7月に実施した事前アンケート結果と、検証授業Ⅱ期を終えた10月の事後アンケート結果を比較し、数値と記述内容の変化で仮説について検証する。

## IV 検証と考察

### 1 検証の実際

平成29年度中央地区の教育(秋田県教育庁中央教育事務所)には、「音楽活動の中に、子どもの思いや意図を反映させた音楽表現にしていくための言語活動を意図的・計画的に取り入れる」ことが、音楽科の授業改善の視点として述べられている。「人間関係形成・社会形成能力」の育成というキャリア教育の視点を意識して「学びの発信」のプロセスを構想した授業づくりを音楽科で行うことで、考えや思いを他者に広く伝えようとする児童の育成が図られるとともに、音楽科の学びの質も高められると考えた。

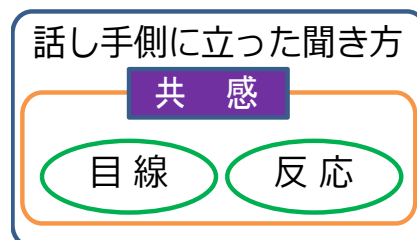
#### (1) 検証授業Ⅰ期の実際(7月)

7月に、題材「日本の音楽1～箏～」において、「さくらさくら」を教材曲とし、箏の基本的な技法を取り上げた。

「学びの発信1」に関わる活動では、話すことに対して「恥ずかしい」「自信がない」等の思いを取り除くための手立てとして、「話し手側に立った聞き方」カードを用いた(資料3)。「目線や反応で共感を示す」ことに学級全体で取り組むことで、「話しやすい」「話したい」「自分を表現しやすい」雰囲気をつくることを児童と確認した。具体的な言葉としては、「キラキラ目線」「うなずきや笑顔」を多く用いた(資料4)。

また、箏という慣れない楽器を弾く不安感を軽減するねらいと、基本的な奏法をお互いに確認したり意見を交換したりできるように、ペア活動を取り入れた(資料5)。演奏を互いに聴き合い気付いたことを伝えたりお互いに息を合わせて演奏したりする中で関わり合いを多くもつことができるように、二部合奏を設定した。「さくらさくら」のイメージを演奏や言葉で伝えたり感じ取ったりする場面では、目線や反応で共感を示すことに加え、自他のよさを認めることを重視した。

その後、児童の意思を取り入れミニミニコンサートを開催し、「学びの発信2」を実施した。「学びの発信2」を通して自分たちが学んだことや思いを相手によりよく伝えることができるように、「相手の立場に立った伝え方」をキーワードにした。このことは、「学びの発信1」の話し手を意識した聞き方と同様に、自分が対面する相手を中心とした考え方である。コンサートのネーミングは、何を発表するか分かりやすいように「さくらコンサート」というタイトルにした。パンフレットやポスター制作、校内放送での呼びかけ、看板・飾り作成、司会、内容構成等について、お互いの意見を尊重しながら実現可能なものについて話し合い、コンサート開催に向けての準備を進めていった。お互いの考えをしっかりと聞き認め合う姿、一人一人が積極的に活動し役割を果たすために努力する姿が見られた。



資料3 「話し手側に立った聞き方」カード



資料4 友達の話聞く様子



資料5 ペア活動の様子

## (2) 検証授業Ⅱ期の実際(10月)

10月に、題材「日本の音楽2～民謡～」において、「秋田音頭」を教材曲とし、身近なテーマで「オリジナル秋田音頭」を創作する学習を設定した。「学びの発信1」に関わる活動では、一人一人のキーワードを基に、「秋田音頭」のリズムに乗せて歌詞をつくることを通して、自分の考えを伝えたり、認め合ったりすることをねらい、グループ活動(5～6人の場面、2～3人の場面)を取り入れた(資料6)。また、グループごとに「オリジナル秋田音頭」の歌詞に込めた意味や演奏を発表し、感想を伝え合った。検証授業Ⅰ期と同様に「話し手側に立った聞き方」カードも用いた。



資料6 グループ活動の様子

その後、学んだことを学級外に伝えるためにどのような方法があるか話し合う場を設けた。児童からは、「ミニミニコンサートを開きたい」「コンサート以外の方法も考えて、学んだことを伝えたい」という意見が出た。そこで、課題解決的な活動を取り入れ、意見の中から実現可能なことを絞り込み、役割分担、準備、練習等について話し合うよう促した(資料7)。各方面との調整も主体的に児童が行い、「New O-N-DO コンサート開催」、「歌詞カードを全校児童に配布」(資料8)、「ホームページに音源と歌詞を掲載」「看板、ポスター、歌詞、写真等の学習の足跡を掲示」を実現することができた。コンサートについては、検証授業Ⅰ期で行った「さくらコンサート」の経験から準備するものや役割等が分かり、限られた時間の中で主体的に行動していた。他の方法については、教職員の了解を得たり支援を受けたりしながら進めることができていた。また、「さくらコンサート」に来校した保護者が家族や他の保護者を誘ってくるケースもあり、「New O-N-DO コンサート」は「さくらコンサート」と比べ、保護者や地域住民の来校者数が2倍になった。



資料7 コンサート準備の様子



資料8 「オリジナル秋田音頭」の歌詞カード(抜粋)

## 2 分析と考察

### (1) 学習シートの分析と考察

検証授業Ⅰ・Ⅱ期では毎時間振り返りを行い、そこから児童の思いや意識の変容を検証した。

「学びの発信1」に関わる記述(資料9)からは、「話し手側に立った聞き方カード」や児童から出た言葉「キラキラ目線」等を用いることで、話したいと思える環境を聞き手がつくることの必要性を児童が実感していた。話しやすい聞き方については、検証授業以外においても学級内で繰り返し行うことで定着が図られてきている。伝えることの苦手意識が軽減され、お互いの考えを交流したりよいところを認め合ったりすることができたことは、自己肯定感の高まりにもつながったと考えられる。自分の考えを伝えられた理由としては、「伝えたいことを自分でしっかりもっていたから」「自分の考えを友達にしっかり

#### <学びの発信1>について

##### 検証授業Ⅰ期

- ・友達がキラキラ目線で見てくれたので気持ち良かった。
- ・普段の勉強にも生かせる「話しやすい・話したくなる」態度を学んだ。
- ・発表のとき、みんなに見守られているような感じがした。

##### 検証授業Ⅱ期

- ・友達からいろいろな考えが出て、「考え方が違うといいものができるんだなあ。」と思った。
- ・あまり意見を言えなくて残念だったが、反応や納得はできたのでよかった。これからは、ちゃんと自分の意見を伝えて「自分がいる」ようにしたい。
- ・友達のいい意見を聞いたり、自分の考えを聞いてもらえたりしてうれしかった。

資料9 「学びの発信1」の振り返り(一部)



「伝えたかったから」などが挙がり、初めに明確に個の考えをもつことが前提となると考えられた。自分の考えが伝わった実感としては、「友達がうなずいてくれた」「『いいね』と言ってくれた」「違う意見を出し合って話し合いが深まった」という記述があり、認められたり共に考えたりすることの喜びを味わったことが分かる。学んだことを友達に発表するという第一段階のゴールに向かい、目的意識をもって活動することで、共感的な聞き方を基にした必要感のある話し合いが生まれ、自分の考えを伝えることで得られる喜びや達成感を味わうことができたと考える。意見をもつことや伝えることを苦手とする児童も、友達の話をきちんと聞いたり反応できたりした部分については、自分を肯定的に見ることができていた。できている部分への賞賛や自信をもたせる言葉かけ等を意識的に行うことで、「伝える」楽しさを味わい、「話したい」という気持ちの高まりが期待できると考える。

「学びの発信2」に関わる記述(資料10)には、学んだことを学級外の人によりよく伝えるために考えたことや、その際に友達だけでなく学級外の人と関わりをもったという記述が多かった。検証授業Ⅰ期では、コンサートに対し手探り状態ではあったが、たくさんの人に来校してもらうための方法や準備を計画したり活動したりする中で、活発な意見交流が行われ、よりよい伝え方を相談したり、役割を果たす達成感や喜びを味わったりする記述が見られた。検証授業Ⅱ期では検証授業Ⅰ期の経験が活かされ、コンサート開催についての役割分担や準備に向けて短時間で話し合いや作業が進み、それぞれの役割の中で自信をもって活動を行っていたことが記述に多く見られ、集団の中で個が活かされていたことが分かる。また、検証授業Ⅰ期よりも多様な伝え方を提案できたことや友達の考えを認める記述が多く見られた。職員への交渉や作業の依頼については、これまで身に付けた相手に応じたあいさつや態度、応答の仕方、経験等を基に、誰に何をどのように交渉し依頼すべきか考え、実行に移していたことが記述や活動の様子から分かった。これらの活動は、人と関わる力や学級の団結力を強めることにつながったと考えられる。さらに、この「学びの発信2」を行うためには、学習したことを「伝えたい」「自慢したい」と思えるような学習内容であるとともに、学習したことが定着していることの必要性が挙げられる。児童の振り返りからは、「とってもいい『オリジナル秋田音頭』ができたので、またコンサートを開きたい」「家族に聞かせたい」というものが多くあり、児童にとって達成感のある学習が「学びの発信2」につながるといことが分かった。

検証授業Ⅱ期の終了後に行った「学びの発信2」に関わるアンケート(資料11)では、「①活動の中で、自分の考えをもつことができたか」に対し、「よくできた」「できた」を合わせると20名(87%)、「②活動の中で、自分の考えを友達に伝えることができたか」に対し、「よくできた」「できた」を合わせると18名(78%)であった。②の質問項目に対して、考えを友達に伝えることが「あまりできなかった」5名の理由を見ると、「自分に自信がない」「考えをもてなかったので伝えられなかった」「話すことが苦手」というものであった。しかし、「あまりできなかった」児童も、決定したことに対して友達と関わりながら役割を果たしたり、友達のよさを見付けたりしながら活動していた。コンサート終了後の振り返りでは、「緊張したけれど一生懸命頑張った」「緊張して笑えなかったけれ

#### <学びの発信2>について

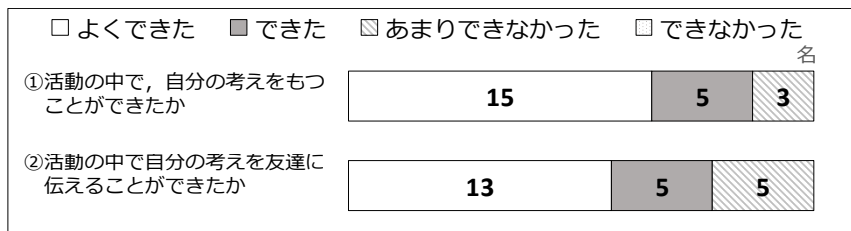
##### 検証授業Ⅰ期

- ・何を聞いてもらうのが伝わるように話し合い、コンサートの名前は「さくらコンサート」とした。
- ・ポスターや招待状が素敵にでき、いい感じです。
- ・ポスターを貼る場所を考え、お願いして職員室や教室などに貼らせてもらった。

##### 検証授業Ⅱ期

- ・「さくらコンサート」の経験を生かして意見を出すことができた。
- ・それぞれの役割を分担して仕事をしたので、早く上手にできてよかった。
- ・たくさんの人に「オリジナル秋田音頭」を伝えるために、友達が「インターネットで発信したい」と言ったのを聞いてびっくりしたけど、「なるほど」と思った。

資料10 「学びの発信2」の振り返り(一部)



資料11 「学びの発信2」に関わるアンケートの結果(一部) 児童数23名

ど、心の中では笑っていた」「またみんなの前で発表したい」という、活動そのものへの達成感や意欲の高まりにつながる記述をしていた。学習シート以外にも、「図画工作科で制作した作品のミニ展覧会や、体育科でできるようになった技のミニ発表会ができるかな」という児童同士の会話があり、他教科等においての実践につながる可能性も見えた。

## (2) 事後アンケートの分析と考察

検証授業Ⅱ期のコンサート後に事後アンケートを行った。事前アンケートの結果と比べると、「授業中、自分の考えを積極的に話したり、話合いに参加したりしているか」の問いに対し、「いつもしている」と回答した児童は3名(13%)から18名(78%)に、「授業中、相手が伝えたいことは何かを考えながら最後までしっかり聞こうとしているか」の問いに対し、「いつもしている」と回答した児童は11名(48%)から21名(91%)に、「話す人が『話しやすい』『話したい』と思えるような聞き方を意識しているか」の問いに対し、「いつもしている」と回答した児童は0名(0%)から19名(83%)に増加した(資料12)。記述には、検証授業の中で学んだ「キラキラ目線」や聞き方・話し方が生活の中で生かされるようになったこと、友達と交流しながら相手を意識したよりよい伝え方を考えることができたというものがあり、考えや思いを伝えることに積極的になってきたことが読み取れた(資料13)。

以上のことから、相手を意識した聞き方に焦点を当てたこと、また、学んだことを学級内外に発信する活動は、他者に伝える力を身に付けるために有効であったと考えられる。

質問項目	いつもしていると回答した人数	
	事前(6月)	事前(11月)
授業中、自分の考えを積極的に話したり、話合いに参加したりしているか	3名	18名
授業中、相手が伝えたいことは何かを考えながら最後までしっかり聞こうとしているか	11名	21名
話す人が「話しやすい」「話したい」と思えるような聞き方を意識しているか	0名	19名

資料12 事後アンケートの結果(一部) 児童数23名

### <事後アンケート>記述より

- ・音楽の勉強の中でキラキラ目線や聞き方・話し方を意識することを学んだので、生活の中でも自然にそれができるようになりよかった。
- ・学級以外の人へ学んだことを伝えるために、聞いてくれる人のことを考えることや友達と意見を出し合っている方法を考えることができた。
- ・学んだことを伝える経験を2回して、ぼくたちの元気を伝えたり、多くの人と話ができたことでよかった。
- ・伝えるよさについて考えたことがほとんどなかったが、今回の授業を通して考えることができた。自分の思いを伝えることは楽しいということが分かった。

資料13 事後アンケートの自由記述(一部)

## V 成果と課題

- ・「学びの発信2」に向けた活動の際に、「学びの発信1」で育成された聞き方や表現する力が生かされ、「学びの発信」のプロセスの有効性が見られた。
- ・キャリア教育の視点を重視した「学びの発信」のプロセスを通して、人と関わる力や友達と協力・協働する力が高まり、そこで得た安心感や自信を基に自分の考えや思いを他者に伝えようとする意識の向上が見られた。
- ・自己肯定感の低い児童や表現することに苦手意識をもつ児童に対して、友達や教師からの評価を意図的に伝えることで評価の質を高めたり、伝え合う場面の設定やグループ編成の工夫を継続したりすることで、自信をもって考えや思いを伝える児童の育成を図っていきたい。
- ・単元(題材)構成を吟味し学習活動を組むことで、「学びの発信」のプロセスの汎用化が可能になると考える。他教科等、他学年においても実践を試み、検証を行いたい。

### <参考文献>

- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社。  
 文部科学省(2015)『小学校キャリア教育の手引き<改訂版>』教育出版。  
 リクルート社(2016)『キャリアガイダンス 7月号 Vol.413』リクルート社。